

古民家で暮らすハチたちを調べて

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

人家に暮らすハチたち

皆さんの中には、家の庭や屋根裏にスズメバチやアシナガバチが巣を作り、困ったことがある方も少なくはないかと思います。実は、巣を作るハチにとって、人間が作った建物は魅力的な営巣場所でした。そして、昔から多くのハチが人家などを上手に利用し、居候してきました。例えば茅葺屋根は最高の住みか、太さ、環境(日当たり、方角)の違う様々な茅のおかげで、体の大きさや生態の異なる多くのハチがここで暮らしていました。彼らは人間の住むエリアに営巣し、周囲の森林や畑地などで餌を狩り暮らすことから、人里に暮らすハチ、里蜂とよばれます。彼らのごく一部(スズメバチとアシナガバチ)は人間を刺しますが、その他の大多数の里蜂はおとなしく、人を襲うことはまずありません。

先程、「…営巣場所でした」と過去形にしたのには、最近の建物は汚れが付きにくく、隙間もないため、一部のハチを除いて巣が作れない、あるいは作りにくいからです。かつて普通に存在した茅葺屋根の木造建築や土壁の建物は里山の昆虫同様に激減し、いまでは神社や農作業用の小屋を除き、多くは姿を消してしまいました。そして、かつては無数にいた里蜂も、各地で姿を消しています。その上、ハチはチョウやトンボ、甲虫などに比べると人気がないためか、愛好家も少なく、県内の人家にどのようなハチがどれくらいいたのか、資料はあまりありません。従って、レッドリストを作成するときなど、そのことが大きな障壁となります。

川崎市立日本民家園での調査

昨年、筆者と博物館昆虫分野ボランティアの有志は、川崎市にある川崎市立日本民家園において、ハチを中心とした昆虫の調査を企画しました。当園は神奈川県随一の古民家、伝統的建造物の保存施設で、20を超える伝統的木造建築に加え、周囲にも緑地があり、現在では姿を消した多くの里蜂が生き残っているのではないかと考えたため

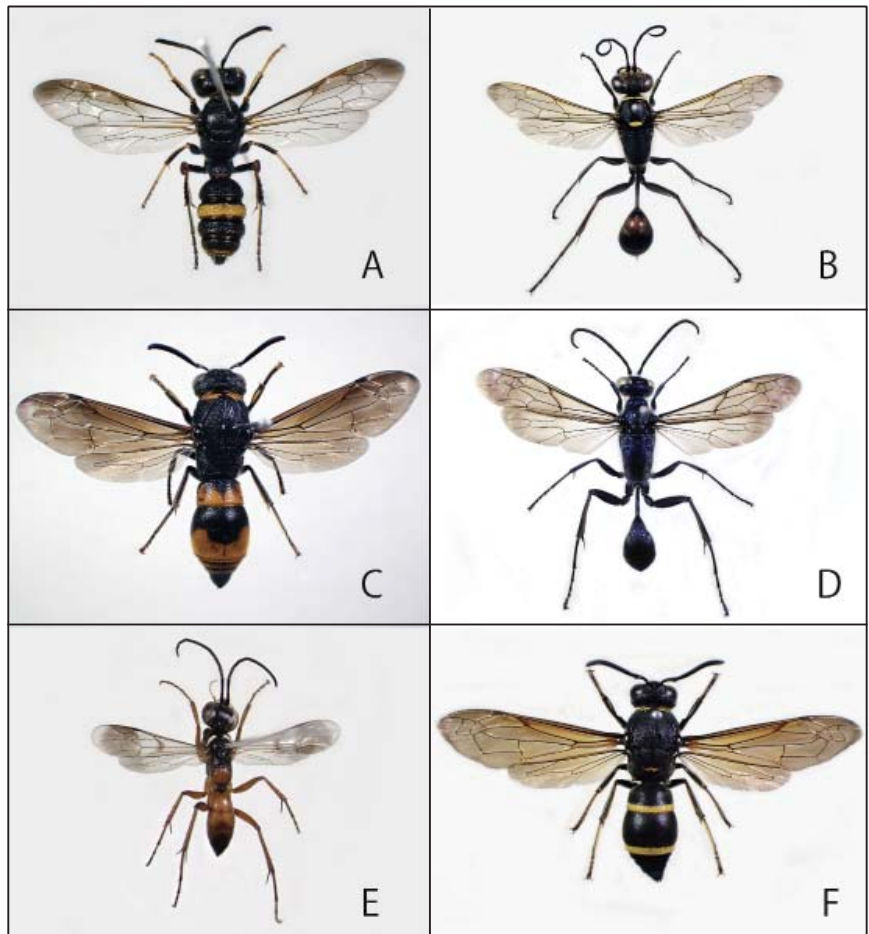


図1. 今回の調査で得られた代表的なハチ — A. ソボツチスガリ, B. ニッポンモンキジガバチ, C. カバフドロバチ, D. ヤマトルジガバチ, E. ミイロツメボソクモバチ, F. オデコフタオビドロバチ

です。

調査は月に1~2回、川崎市青少年科学館の川島逸郎学芸員にも参加いただき、数名で園内を歩き、ハチを採集して調べました。ハチの仲間は俊敏に飛ぶ上、近似種と見た目が似た種も多いため、現地で種名がわからないものもあり、必要に応じて標本にしました。許可なく調査できない場所であることに加えて、人文系の興味が主な来園者であるため、来園者から見て相当奇異に見えたらしく、多くの方々にお声掛けいただきました。たいいていの人にはハチと聞くと怖がるのですが、詳細を説明すると理解していただけたようで、中には興味を持って下さった方もいたことは、我々にとっても収穫でした。そして、興味深いことに、^{おびただ}夥しい数のハチが人家周辺を飛び回っているにもかかわらず、ほと

んどの方がその存在に気付かなかったことがわかりました。これは、言い換えれば里蜂の多くが人畜無害な居候であることを示しています。

調査の結果は驚くべきものでした。120種を超えるハチが園内で採集でき、そのうち100種近くが、古民家、あるいはその周囲(庭など)となんらかの関係をもちハチだったので。そして、希少種や、他では近年見られないほどの個体数が見られた種、最近になり分布を拡大している種など、様々な興味深いハチたちが、我々の捕虫網に入りました。その中でも希少種であり、県内からは数カ所しか記録がなく、営巣場所の報告がなかったソボツチスガリ(図1A)を発見し、旧船越の舞台(図2)に多数営巣していることが明らかとなったことが最大の収穫で、調査メンバー(の一部)

はうれしさのあまり、飛び跳ねて喜びました。その他、ニッポンモンキジガバチ(図1B)、カバフドロバチ(図1C)、ジガバチモドキの仲間やマエダテバチの仲間(図3)など、最近はめっきり姿を消したハチが多数見られ、日本の伝統的な木造建築がどれだけハチたちの生息に好適であったのか、目の当たりにしました。また、ヤマトルリジガバチ(図1D)やツツハナバチ、シリアゲコバチなどの個体数は極めて多く、蚊柱のように視界一面に舞うヤマトルリジガバチが県内で見られるとは、夢を見ているような気持ちになりました。本種にとって日本民家園は、まちがいなく県内で最良の生息地のひとつであると言えます。昔の神奈川県、あるいは日本各地にこれだけ多数のハチがいる環境が豊富にあったとすると、昔の昆虫学者が里蜂を含むハチの生態について多くの論文を書けたのもうなずけます。そして県内各地に暮らす里蜂の多くが、いかに危機的な状況であるかも実感できました。

調査をしていて気づいたこと

ハチたちは茅葺屋根、土壁の隙間、竹筒、石垣や板切れの隙間、床下など、様々な環境を利用して生活しています(図2~4)が、たくさんハチがいる家と、そうでない家があることに気が付きました。詳細は論文とすべくまとめているところですが、①屋根の縁が低い家にハチが多い、②日当たりがよく、乾いた環境のある家にハチが多い、③家の前が開けすぎており、緑地との間にスペースがありすぎるとハチが少ない、④家の囲炉裏で煙を立てていても、ハチの生息には影響がない、といった点が見えてきました。ハチのカウントが難



図2. ソボツチスガリが営巣する床下を調べる筆者。

しく、時間も限られた状況のため、これらについて科学的に説明できるデータはありませんが、調査をしたメンバーの体感として、これら4点は特筆すべき印象でした。

今回の調査では分布を広げていると思われるハチも多数確認できました。代表的なものとして、ツマアカクモバチ、ミイロツメボソクモバチ(図1E)、オデコフタオビドロバチ(図1F)の3種が挙げられます。前2種は近年各地で見られるようになり、他のクモバチが環境悪化で減少・絶滅したニッチをうまく利用しているのではないかと、個人的には考えています。オデコフタオビドロバチは2015年に新種として記載されたハチですが、近年になり突如日本各地で採れだしています。ちょうどタイワンタケクマバチやムネアカハラビロカマキリの増加とタイミングが同じため、海外から輸入された竹製品などに随伴して移入された外来種でないかと、個人的には考えています。本種は営巣場所が近縁種のオオフタオビドロバチと同じため、競合が心配されます。実際、今回の調査ではオオフタオビドロバチの方が少なく、今後両者のモニタリングをしておく必要があります。

里蜂の保全のために

木造建造物の保全は、一般的な里山の自然保護ではほとんど注目されません。これはハチも同様です。しかしながら、昆虫の中でも大きな一群であり、他の生物と密接にかかわるハチの保全も、他の生物と同様に、重要であることは疑いの余地がありません。現在の里山には神社や古くからの民家など、ごくわずかな木造建築物があるだけで、耐震化などで改築などをする場合、



図3. 茅葺屋根に巣を作るオオアゴマエダテバチ(矢印)。

周囲に代替となる営巣地が無い場合、ハチは姿を消してしまいます。従って、個々のハチの営巣場所を調査し、周囲にそのような環境を人為的に再現することで、全滅のリスクを減らす試みは意味があるかと思います。また、都市部では過剰な駆除も問題です。確かにスズメバチやアシナガバチによる刺傷を避けるために、巣の駆除はやむを得ませんが、人がほとんど寄りつかない植え込みのアシナガバチが駆除されたり、すぐに殺虫剤をまいたり、少々やりすぎの感があります。毎年秋になるとマスコミがスズメバチの恐ろしさを過剰なまでに煽るため、市民が怖がることも無理はないのですが、身の回りのハチについて正しく理解し、適切な距離を持ってつきあうことが、ハチの保全において一番大切なことかもしれません。

謝辞

調査に参加された当館昆虫ボランティアの皆さん、川崎市青少年科学館の川島逸郎学芸員、調査の許可など、多くの御援助をいただいた川崎市立日本民家園の関悦子学芸員に感謝申し上げます。



図4. 屋根裏に作られたエントツドロバチの巣。